

Title	羽田海面稼方に関する紛争 (社会経済史資料紹介)
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.11 (1935. 11) ,p.1693(89)- 1719(115)
JaLC DOI	10.14991/001.19351101-0089
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19351101-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

羽田海面稼方に關する紛争

(社會經濟史資料紹介一)

野村兼太郎

海面稼方、即ち漁業權の問題は、徳川時代に於いても相當厄介なものであつたらしい。明治廿八年農商務省水産調査所調査に依る「舊藩時、漁業裁許例」には百四十餘件を収録してゐる。勿論これは河川の分も含めてはゐるが、これで全部ではない。私の蒐集し得た僅かな資料中にも、二三漁業權に關するものがある。こゝに紹介しようと思ふのは、羽田附近の漁業に關するものであるが、この地の漁業權はかなり古い時代から問題となつてゐたものらしい。「東京府民政史料」(大正九年刊)一八頁以下に、徳川時代羽田近海採藻に關することと題し、正徳五年(一七一五)訴訟判決書、及び延享元年(一七四四)和融書付の二文書を収録してゐる。前者は前掲「裁許例」九頁にも記載されてゐるものであるが、深川獵師町以下諸町と六郷領羽田、大森の諸村との争で、深川側は古來から御領所内海の分は入會であるから、羽田大森の村下へ漁獵に出てもよいと主張し、羽田側は入會でないとして主張する。結局この判決は羽田大森側の勝利に歸し、その漁業權が確認されたわけである。こゝに後に紹介する文書に關係ある點で、注意して置かなければならないのは、羽田大森の答申中に次ぎの如き句があることである。

「羽田も當浦貝獵を以致渡世、大森も村前之貝類藻草等を以田畑こやし致來」

又漁獵の範圍を、北は大森前御林町浦境一之濤杭跡を東南棒杭跡内輪と指定してゐる點も後に多少關係がある。

延享元年の事件は、荏原郡下袋村が羽田大森の諸村を訴へたのであつて、その主張するところは、下袋村は古來糍谷村と一村であつた關係上、海岸ではないが、糍谷村磯で藻草貝類を採取してゐたのに、羽田大森の者がこれが差止を申越して來たが、それは心得難いと云ふのである。羽田大森側はそれは偽りである。隣村だから多少の藻草貝類を手取りにすることは從來見逃してゐた。然るに當年舟で乗出し、鋏羽口と云ふ道具で貝類を取つて商賣にするから、差止めたのである。下袋村は元來磯付でなくその權利はないと主張した。これも亦大體羽田大森側の主張が通り、下袋村は從來の慣例として手取りは認められたが、他は證據不十分として却下されたのであつた。

この海面の漁業權に關し、世に公刊されたもので管見に觸れたものは、以上の二つだけである。ところがこの海面の問題はその後も絶えずいろ／＼な問題があつたやうである。深川獵師町を排除し、さらに磯つきならざる村々を除去した羽田大森の諸村は彼等相互の間に争ひを惹起したのである。彼等の争ひは、すでに正徳享保の頃に起つたものであつて、前述せる如く羽田側が純粹漁村であるのに對し、大森側が農村であつて、肥取のための漁獵であつたことに、端を發してゐる。最初羽田側諸村が天保十一年(一八四〇)に提出した訴訟狀を紹介しよう。

「乍恐以書付御訴訟奉申上候

中村八大夫御代官所

武州荏原郡南品川獵師町

大井村之内

御林獵師町

羽田獵師町

同當分御預り所

同州橋樹郡 生麥浦

新宿浦

神奈川獵師町

右六ヶ浦獵師浦役人惣代

羽田獵師町

訴訟人 組頭 利 助

御林獵師町

同 獵師頭 忠 兵衛

生麥浦

同 年寄 重 治郎

魚獵出入

揖斐與右衛門様御知行所

同州橋樹郡小田村

相手 名主 甚左衛門

同 年寄 平 兵衛

間宮庄五郎様御知行所

同州同郡同村

同 名主 藤 藏

同 組頭 權 兵衛

小幡監物様御知行所

同州同郡同村

同 名主 三郎兵衛

同 年寄 五郎右衛門

中村八太夫御代官所

同州同郡同村

同 名主 左五右衛門

同 年寄 重 兵衛

同御代官所

同州同郡菅澤村

同 名主 傳 左衛門

同 年寄 太 兵衛

同御代官所

同州同郡潮田村

同 名主 藤 右衛門

同 年寄 忠 藏

同御代官所

同州同郡東子安村

同 名主 忠 右衛門

同 年寄 德 兵衛

同 名主源右衛門幼年二付後見

同御代官所

同州同郡西子安村

同 名主 久 治郎

同 年寄 長 右衛門

同御代官所

同州同郡渡田村

同 名主 太 平

同 年寄 茂 左衛門

同御代官所

同州同郡下新田村

同 名主 彦 兵衛

同 年寄 四郎右衛門

同御代官所

同州同郡大嶋村

同 名主 十郎兵衛

同 年寄 權 藏

同御代官所

同州同郡池上新田

同 名主 直 藏

同 年寄 治右衛門

同御代官所

同州同郡稻荷新田

同 七左衛門組名主 太左衛門

同 六郎左衛門組名主 六郎左衛門

同御代官所

同州同郡川中島村

同 年寄 久右衛門

同 太郎左衛門

同御代官所

同州同郡大師河原村

同 名主 左五右衛門

同 年寄 重 治 都

同御代官所

同州同郡稚谷村

同 年寄 善 治 郎

同 年寄 茂右衛門

同御代官所

同州同郡東大森村

同 名主 兵左衛門

同 年寄 吉 兵衛

同御代官所

同州同郡北大森村

同 年寄 五右衛門

同 同 助左衛門

同御代官所

同州同郡西大森村

同 名主 甚兵衛

同 年寄 彌兵衛

同御代官所

同州同郡不入斗村

同 名主 太左衛門

同 年寄 庄左衛門

右訴訟人、利助、忠兵衛、十次郎一同奉申上、私共浦方之儀者磯附百姓村々と違、乍恐御入國以來、御由緒有之、大切之浦役御用數多相勤上、御府内並濱御庭、又者近郷筋御成之節、年々度々魚獵御上覽御用、其外魚貝類御好御用、種々相勤罷在、往古々廣場之海面進退仕、御當地金杉浦、木芝浦并南品川獵師町、大井村之内御林獵師町、羽田獵師町、生麥浦、新宿浦、神奈川獵師町、右八ヶ浦組合、御茶御肴代永井月々正魚無代上納仕、其外船役永と號、海面御年貢奉納、從古來御用向精々大切ニ相勤、冥加至極難有仕合奉存、尤羽田浦之儀、北々御林町浦境一之滯杭跡、南々生麥浦境東南之棒杭跡迄、海面四里八町余進退罷在、羽田生麥兩浦之儀、大浦ニ有之、一躰私共浦々之儀、田畑無之、居屋敷而已之獵師百姓ニ而、海面ヲ田畑同様ニ相心得、大勢之獵師共、海業而已ニ而父母妻子扶助養育罷在、然ル處海面無役之相手村々ニおゐて不法之働仕、從前も度々及出入、

再應御裁許有之、支配御役所御觸渡被成下、磯附村々之もの共、肥魚藻草貝類取揚、何れも居村下限り、他村他浦江不入込、肥魚獵之儀、おち突、養引、黒小曳ニ限り、夫共白淵之外藻通ニ而も、一切不相成、貝類之儀も歩行ニ而相勤、船ニ而働、難成、且取揚、魚貝田畑肥食用ニ致、迄ニ而、賣買又仲買問屋江戸廻シ等、決而不相成極、尤貝類取揚ニ付而も、夏土用明ケニ至リ、羽田獵師町濱留之儀觸出、十月下旬、十一月月上旬之内濱留相勤、而、右濱留中、貝類取揚、嚴敷差止來、八ヶ浦一同無難海業渡世、浦役御用向相勤罷在、近來相手磯附村々儀、御裁許御觸渡之御趣意相肖、手儘ニ新獵相企、右濱留中を破り、腰巻と申道具を以、貝類盜掠致、其上磯附村々肝要之黒小曳網を、三大森村之もの共、重立先規ニ振、新規大形ニ仕直、鐵岩細目之網を用、八ヶ浦稼場晝夜曳荒、付、細藻中藻江産付、諸魚之子胤を取絶、相手之内小田、菅澤、潮田、子安、渡田、下新田、大嶋、右村々之儀、獵師大切之藻を堀起、又、刈取見突と申道具ヲ以、長繩小網ニ懸リ居、魚類を集取、或、藻中江竹筒相伏、魚之子取盡、獵專相稼、既文政六未年、相手村方不法之相働ニ付及出入、磯附村々申分難立、以來、先規之通り可相守旨、濟口證文差上、詫一札等數通取置、得共、村々有徳之餘り、困窮之獵師共と見掠、強勢増長仕、白淵之外藻通り、明淵、之淵邊迄も罷出、獵場差妨、取揚、魚貝仲買問屋江相渡し、既ニ相手之内小田村五郎右衛門義、年寄役も乍致居、仲買問屋致、稻荷新田、七左衛門組百姓彌助、喜八義も同様之渡世相始、驛場在町、江戸廻し、賣買仕、何様差留、而も、我意而已中募相止不申、八ヶ浦一同及難治、付、去成九月中、磯附村々相手取、當御奉行所様江奉出訴御願、右様及不法者、共々捕押、其上ニ而出訴可仕筋之旨、厚御利解被仰聞、一旦訴狀御願下仕、浦々役人共及相談、俄ニ差押、却而騒敷可相成旨一同申之、先規之通支配御役所江御觸流し奉願、則御觸渡御座、其後至リ

い而も、大森村之者共、重立相手村と一同馴合、大卷と申道具ヲ以、獵師同様貝類船取仕、日々にたり船數艘ニ而江戸廻し賣買仕付ニ付、難捨置、同去月十三日右貝類江戸積船三艘捕押ハ處、稻荷新田百姓彌七、傳三郎、市左衛門、池上新田惣七、惣五郎、久藏と申者共ニ付、則右村役人共江及懸合ハ處、右尾張様御用ニ付、深川干鰯場江積送り肥物と賣替致ハ杯、容易不成義申之ハ得共、肥取替之儀ハ享和年中及出入、決而不相成極ニ有之處、何共如何敷ハニ付、尾張様御勘定 所江も奉伺ハ處、於御屋形様其浦村定有之儀を相破、右様之義御領百姓江被仰付ハ筋無之旨被仰聞ハ、然ル處御支配ニおゐて、月廻旁御利解も御座ハニ付、無餘義同廿五日右貝類并船人夫とも村役人共江引渡遣ハ處、不得止事、貝類船積致シ、御當地間屋共江相廻シハニ付、去亥三月五日木挽町四丁目七郎兵衛店貝問屋右之河岸ニ而大師河原村百姓吉右衛門と申もの貝積船捕押、右貝類も勿論、にあり船壹艘、船具并斗樽共不殘(二字不明)方江相預ケ、預リ一札取置、猶追て捕押可申杯罷在ハ處、又ハ此節大森村百姓又右衛門、又五郎、八五郎、市五郎、重立獵師同様、鵜繩、盛行網、小網、繩船等種々魚獵仕、浦々獵場夥敷相荒シ、彼是差留ハもの共ハ即座ニ打殺ハ杯、不容易義申聞、其外相手村と一同馴合、品々不法之稼致、且おち突、簀引、黒小曳之肥獵ニ至迄、他村他浦江入込、居村下限リ之疆界を申紛、沖之方藻通、明淵、一之淵迄も罷出、獵師共稼場一圓差妨、肥物ニ取揚ハ、魚貝賣買江戸廻シ仕、何様及懸合ハ而も、勝手儘之義而已申し取敢不申、強勢申募、八ヶ浦一統獵業差障、渡世衰微仕、難澁至極仕ハ間、不得止事、今般御訴訟奉申上ハ、何卒以御慈悲前書之始末被爲聞江譯、相手村と役人共其外仲買致ハもの共、一同被召出、不法之廉と逸と御吟味之上、御裁許御觸渡シハ趣意、堅相守、藻通ハ沖之方獵師共稼場不差妨、前々通磯附居村下限、他村他浦江不入込、白淵之内ニ而藻草貝類肥魚取之、賣買も勿論仲買問屋江戸廻シ等、決而ハ仕、都而獵師共ニ紛敷義無之、私共浦々無恙浦役御用

向相勤、渡世永續相成様、被仰付被下置度、舉而奉願上ハ以上、(下略)

右漁村八ヶ浦から小田村以下磯付村とに對する訴狀は同年七月廿五日に受理され、十一月二日評定所に罷出、對決すべき旨が通達された。即ち小田村の役人達が惣代となつて左の如き受書を相手方に渡してゐる。

「拜見證文之事」

一六ヶ浦御惣代として貴殿方三人ハ我等共相手取魚獵出入御申立、深谷遠江守様迄被及出訴、來ル十一月二日御差日御尊判頂戴罷在ハ付、村役人、五人組一同立會拜見承知仕ハ、御判物表裏墨付汚等無御座、儘預リ置申ハ、御差日四日以前出府之節に持參罷出可申ハ、答御届之儀も前書御差日四日以前朝五ツ時、村役人差添返答書貳通宛持參答御届可申上旨、從御奉行所様被仰渡之趣御申通じ被成、是又承知奉畏ハ、尤壹ヶ村并壹組限拜見證文差出ハ上、御差日四日以前御刻限通、急度出府答御届可申上ハ、仍拜見一札差出申所如件、

武州橋樹郡小田村
揖斐與右衛門知行所

天保十一年八月四日

名主 甚 左 衛 門
年寄 平 兵 衛

間宮庄五郎知行所
同州同郡同村

名主 藤 藏
組頭 權 兵 衛

小幡監物知行所
同州同郡同村

名主 三郎兵衛

年寄 五郎右衛門

中村八太夫御代官所
同州同郡同村

名主 十兵衛

同 左五右衛門

右組代衆

差添人 年寄 八郎左衛門

同 組頭 傳兵衛

御菜六ヶ浦惣代

羽田獵師町

組頭 利助殿

御林獵師町

獵師頭 忠兵衛殿

生麥浦

年寄 十治郎殿

この請狀は訴へられた村々がすべて個々に渡してゐるものと思はれる。唯名宛が八ヶ浦でなくして、六ヶ浦になつてゐる理由は十分に解らない。この訴訟は容易に判決が與へられなかつた。天保十二年十二月廿五日に取調があり、その結果は農村側に不利であつた。農村側はこの取調に不服であつて天保十三年寅二月に、大嶋、渡田、小田、下新田、潮田、菅澤等の組合村は「海面稼方仕來り書」を提出して、その旨を訴へてゐる。この書面は又農村側の主張するところを知ることが出来る。

「一私共村之儀者於海面ニ藻草、貝類其外仕來之小獵ニ落突見突簀引黒小引網海糠搦相稼、田畑肥ニ仕、農間大小之百姓共、日々海面罷出、右貝類小獵仕ゆ而、御年貢上納、諸御役、助郷人足共相勤、右ニ付海面稼方之儀、御田地同様肝要と相心得、右も末之小百姓共ハ猶更海面一方之稼を以、夫食并薪其外諸色迄買調今日經營罷在ゆ故、今般羽田獵師町外五ヶ浦私共村と相手取一件中、去丑十月十五日論所地御改として、向島眞兵衛様、小野好之助様御出役之上、訴答村と并論所海岸共御見分、右御滞留中私共村と御檢地帳、御割付等、明細御取調之上、去丑十二月廿五日品川宿於御旅宿、村と組合都合拾七ヶ村之者共申口、口書被仰付、右口書與御詰御文言之内奉承知ゆ處、訴訟方之者共申口も御取用ニ相成、私共村と惣代共申立ゆ廉も多分御取潰ニ相成、譯而右之内藻草船役永之儀も壹艘に付永三拾文宛ニ相當り、百姓共銘と藻草船所持致しゆとの申分難立趣被仰渡ゆ得共

此段村と右藻草船役永上納被仰付ゆ儀も、享保之度も上納仕ゆ儀ニ付、其以來銘と所持仕、貝藻取揚、御年貢上納夫食足合ニ稼來申ゆ、尤享保之度と只今とハ村と家數人別之儀も多分ニ相成、是ハ百姓共斗ニ而ハ無之、獵師共も同様、家數船數相増居ゆ義ニ御座ゆ處、獵師共其儘被差置、百姓共江而已御察當有之ゆ而も難

澁仕

近村、御割付等御見合御座、御取箇向私共村、同様ニ付、私共村、ニ而藻草貝類を以耕作致し、御年貢上納致し、との申分難立被仰渡、

此段近村、御割付御年貢上納方之儀も同様ニ御座、右近村、江、私共村、より多分入作ニ罷越耕作仕、右肥類之儀も不殘海面、貝藻取揚、御田地相養、右近村、之分も御田地手參不申無滯御年貢上納相成申、其上海邊附村、之儀、村毎ニ大場海面汐除圍堤有之、大破之節、御普請被仰付、小破之節、自普請ニ取繕申、故、不事之入用、多分相懸り申、殊ニ近年御新田多分出來申、海邊堤際水地之場所迄御檢地御高入ニ付、猶更以自普請之入用多分相懸り申、

享保十五戌年御裁許御公儀様御書留御請證文虫喰ニ相成り不相分、上、私共村、差出、右御裁許御爲寫所持罷在、自分も、自己之書留ニ而御信用難爲遊被仰渡、

此段右御裁許之儀、享保十五年伊奈半左衛門様於御役所ニ被仰渡、其以前羽田獵師町と私共組合之内、稻荷新田、大師河原村、河中嶋村と貝藻取揚方之儀ニ付及出入、享保十巳年御裁許被仰渡、獵師百姓共貝藻賣買之儀、急度可爲停止旨被仰渡、然ル處其後又、右村町之もの共及再論出入ニ相成、前書之通、同十五戌年再御裁許被仰渡、獵師之儀、先達藻草貝類取之賣買之儀、令停止といへ共、輕キ獵師共及渴命之間、五拾錢三拾錢宛、代替渡世可致、百姓之儀も手取之貝類賣、令停止といへ共、末之百姓共及渴命之間、近在江持運、貳拾錢三拾錢宛、代替渡世可致被仰渡、尤江戸間屋仲間等江賣渡中間敷趣、百姓獵師共双方江被仰渡、夫、引續於百姓共、も勝手次第賣買仕、然ル處獵師とも今般奉出訴、趣ニ而、百姓

共、右貝藻賣買之儀、不相成趣、相心得居、前書奉申、上、通、享保之度御差免ニ相成、以來、別段御裁許等無之、數年之間百姓共是迄、無滯渡世罷在申、

村下限相稼他浦他村江不入會様被仰付被下置度、獵師共、申立、口書被仰付、得共、
此段先達而御出役様方江書面を以奉申、上、通、他浦他村と申、私共組合拾七ヶ村之儀、數年來之間一村同様之組合ニ而、右之外罷出、儀も他浦他村と相心得、都而拾七ヶ村下、同様ニ而先、入會相稼申、場所ニ御座

右奉申、上、通、享保十五戌年以來、無難ニ百姓相續罷在、只今ニ至リ故障等出來致し、而、御田地相續、勿論、數千人之者共、今日助命相成不申、依之荒増之譯奉申、上、通、御座、已上

天保十三年寅二月

しかし農村側の不利なことが明かに豫測され、終には駕籠訴する者もあり、各村不穩の傾向さへ現れ始めた。従つて上掲のもので満足出來ず、さらに同年三月次ぎの如き歎願書を提出した。重複するところも少なくないが、敢て全文を掲げる。

「乍恐以書付御歎願奉申、上、通、

御代官伊奈半左衛門、關保右衛門立合當分御預所、武州橋樹郡稻荷新田、同大師河原村、同川中島村、同池上新田、同大嶋村、同渡田村、同下新田村、同汐田村、同菅澤村、右兩人立合御預所、間宮新次郎、揖斐與右衛門、小幡監物知行所同州同郡小田村、右半左衛門保右衛門立合當分御預所同州同郡東西子安村、右拾壹ヶ村役人惣代左之名前之者共、一同奉申、上、通、

羽田海面稼方に關する紛争

去子六月中右兩人御預所同州荏原郡南品川獵師町同州橋樹郡神奈川獵師町迄六ヶ浦獵師惣代共、私共村と相手取、魚獵出入之旨、深谷遠江守様、御勘定御奉行御勤役中、奉出訴御吟味中、御同人様御轉役ニ付、佐橋長門守様江御引渡ニ相成、猶又當正月十八日跡部能登守様江御引渡之旨、右於長門守様御奉行所被仰渡、御同人様御吟味中、論所海面難御決ニ付、去丑十月中御評定所御出役、論所地爲御改、向島眞兵衛様、小野好之助様、同月十五日訴訟方之内羽田獵師町江御出役有之、同廿五日迄同所江御滞留、同日十一月七日迄池上新田江御止宿、夫々神奈川宿大森村江御滞留、右御逗留中訴答共、村柄并論所海岸共御見分之上双方江御檢地帳、御割附、人別帳並訴答證據書類不殘差出可申旨被仰渡、其外願意等有之ハ、是又巨細書面を以可申立旨被仰渡ニ付、私共村と之儀も、先年御裁許有之、其以來藻草青佐貝類も大巻腰巻手取、其外魚獵之儀も落突見突簀引黒こ引網海獺獨海鼠標取、右等之稼を以、數年來海面稼相續罷在儀ニ付、別段親規之儀可相願存念無御座、其段委細書面を以奉申上、殊ニ私共村と之儀も享保十巳年羽田獵師町と當組合之内稻荷新田、大師河原村、川中嶋村と海面稼方之儀ニ付及出入儀、同年御裁許被仰渡、獵師之儀も藻草貝類取之賣買之儀ハ以來致間敷、百姓之儀も手取之貝類賣儀是又以來決而致間敷、双方江右賣買御停止被仰渡、然ル處海面稼方ニ付、獵師百姓間柄不成穩、依之前書村町之者共猶又及再論出入ニ罷成、其節御支配伊奈半左衛門様於御役所、一件御糺明之上、同十五戌年再御裁許被仰渡、獵師之儀も藻草貝類取之賣買儀令停止旨先年中渡儀得共、輕キ獵師共及渴命之間、五拾錢七拾錢宛代替渡世可致、百姓之儀も手取之貝類賣儀令停止といえ共、末之百姓女童之者及渴命之間、是又近在江持運、貳拾錢三拾錢宛代替渡世可致旨、双方江御慈悲之御裁許被仰渡、且江戸間屋仲買等江賣買儀一切不相成趣被仰渡、上之、獵師共ニ限り勝手儘ニ江戸間屋中買江賣買儀と申儀ニ有之間敷、獵師も百姓も心得違私欲ニ長じ、金錢

融通而已專一心掛、江戸間屋中買等に賣買而自と田畑之肥類不足ニ相成、且も百姓共も農事疎ニ相成儀故、御裁許被仰渡儀趣と、私共村と古來之申傳にて銘々承知罷在儀ニ御座、然ル處寛政年中貝類からのま、田畑江肥ニ遣儀而追々御田地龜田ニ相成儀ニ付、からの儘差入儀嚴敷御停止被仰出、右ニ付其節ハ獵師百姓和融を以、双方共江戸間屋中買等江賣渡、百姓共も御府内ニ而下肥と取替、田畑耕作儀、數年來之間、御田地相卷來、然ルを獵師共儀、百姓海面稼方ニ付而賣買等不相成様ニ相心得儀得共、右體享保之度御裁許以來、百姓共江貝類賣買御差留之被仰渡等無之、是迄數ヶ年之間無難ニ海面稼罷在、且私共村と之儀も村高不相應多人別ニ付、御田地一方之農事にてハ中々以、末之百姓露命繫兼、其上山林秣場余地等も無御座、海面新開場末地ニ至迄、悉ク御檢地御高入ニ有之、三方ハ海川ニ取巻、用水も流末にて、水旱損共兩難遁かた、且私共組合子安村之儀も天水場ニ付、是以旱損多く、稻荷新田ハ子安村迄拾壹ヶ村之儀も、高合七千石餘、人別も九千六百余人、御田地も九百六拾町步余、右御田地江海面ハ取揚ケ肥差入儀分、金高ニ見積リ儀而、田方壹反分江金三分位、畑壹反分江金貳分貳朱位宛、貝藻肥差入不申儀而、耕作相成兼、右代金凡六千四百兩余ニ相成、其外近村五六ヶ村江私共村と之者共罷越出作仕儀分、凡百廿町步余入作、右肥類も不殘是又海面之貝藻を以耕作、御年貢米永井小作米永共差出、前奉申上儀通り山林余地無之村方故、竹木等更ニ無御座、百姓末之者共、雜穀并朝暮之薪ニ至迄、不殘買調儀而其日差送り儀者共御座儀得、誠ニ海面一方之稼、助錢を以、父母兄弟妻子相養、依然ニ罷出、身命限り相働儀而夫食諸色買調、漸助命罷在、今般訴訟方六ヶ村之もの共、御奉行所様江申立儀趣にてハ、御茶御肴御用向相働儀右權威を以、百姓ども相掠品と不相當之難題等申掛、其外右獵師共も浦役御用向相働

い得共、百姓共も海面無役之旨申立い得共私共、於村にも諸御奉行様御尊判并諸御役人様方、其外諸家様方等
至迄、御用之度御印紙を以、浦御觸書相廻りい節も不限晝夜、刻付を以、浦方同様御繼立御用相勤、其外御用船
も不及申、諸國諸通船共難波船等有之節も急束助船數艘差出、無怪我様夫も取斗世話致遣し、且又汐田村も三
月七月小蛤小魚上納被仰付、右御用向相勤、然ル處海面無役杯と申偽申立い廉、一圓難得其意、殊更以羽田村之
もの共を全海面無役にて御座い處、於海面肥之類も勿論之儀、銘も獵船所持致し、獵師同様相稼、就而も鈴木新田
と申す獵師町名主彌五右衛門儀、開發漸貳拾ヶ年以來新開地も御坐い處、右百姓共當時獵師同様、獵船數艘所持
いぬし、專獵業相稼、右も羽田獵師町之者共も兩村共左^右之儀故、見遁置い次第可有之哉遁もい得共、今船訴
訟方之内、品川御林町生麥新宿神奈川、右五ヶ浦獵師町之者共、右舛羽田鈴木新田海面無役も勿論、百姓にても
勝手儘も獵師相稼いも打捨置出入訴外致し、私共村も仕來之稼方も差障り及出入い始末重も難心得、右前文之趣、
去丑ノ十月中も十二月中迄、巨細之儀向島眞兵衛様小野好之助様江、私共村も惣代共申立い間、是等之儀も急
度御取締、是迄御裁許之御振合も御取捌被成下置い御儀と奉存い處、廉も逸も御取調も無之、俄も去丑ノ十二月
廿五日品川宿於御旅宿、村も惣代共江口書被仰付一同奉驚入、同人共も口書之趣承知仕い處、百姓共申立い廉
も少しも御取用無之、又も口書御除も相成い儀多分有之、且數年之間堅相守、海面稼相續罷在い享保十五戌年御
裁許之儀も、御本紙之儀も虫喰も相成不相分い付、村も御寫として所持罷在い古帳之儀も自己之書留もて御信
用難被成、且近村之御割付等御見合御坐い處、御取箇向同様も付、海邊附村も海面も取揚い肥類無之い而も御田
地耕作、御年貢上納相成兼いとの申分も難立趣も、口書被仰付い由御坐い得共、是も既近村も之儀も私共村も之
もの共多分入作仕い故、御田地も手余り不申、都而海邊村も海邊道、大場之汐除圍堤有之、大破之節も前も

御普請被仰付い得共、小破之節も年中無油斷村繕も仕い故、人足諸色之入用多分相懸り、右も海面堤際迄不殘御
田地御高入も付、堤之手入怠り、汐爲押入い而も丹誠之一作直様空相成、其上御年貢も辨納も相成い付、可成
丈ハ自普請を以^出精取締、依之存外余夏之入用夥敷相懸り、殊も私共村も藻草船役永上納之儀も壹艘も付永三拾
文宛も相當り、然ルを銘も藻草船所持致し居い段難御取用被仰渡い由も御坐い得共、右者享保之度と只今とハ村
も人別も相増、且獵師共連も前もとは是又船數多分相増、然ル處右之者共江も何之御察當も無之、私共村も江而
已嚴敷御察當被仰聞、一同奉驚入、殊も當村御高入御新田地も是又相増、其上御廻米御藏納等之節も毎年御支配
御代官様より御米撰立方嚴重被仰渡い付、格別出精致し、御米吟味不仕い而も御藏納相濟不申、殊更御拳場に
て一ツ橋様、田安様御借場も付、御鷹御用向并虫けら等之御用多分相勤、且東海道川崎宿江も日も御傳馬人足
も罷出、旁以右海面稼方も百姓共差支い様成行い而も、大高町歩之御田地相續相成不申、自然亡所にも可相成、
大勢之百姓共追も稼方も相離れ餓死も可仕筋も落入、左い上も村も可及退轉も外無御座、且又御出役様方神奈川宿
御止宿砌、羽田獵師町名主彌五右衛門義當村も江廻狀を以申觸いも、貝類之儀も御代官江伺之上以來賣買一切
不相成趣認入、村下江印形致し可相廻旨、廻狀差出い付、小前一同驚入、右賣買之儀も享保十五之御裁許御表
も礎と御差免有之處、右不願御表獵師町之權威を以、右舛不法之廻狀も差出い儀も付、早速支配御役所江私共村
も々々相伺い處、御役所も而も一向御存知も無之、且も一件御取調中之夏故、其段御出役先江申立い處、右等之廉
今般口書御除も相成、左い上も以來獵師町者共品も百姓共見掠り取斗可仕いも難斗杯、種も及濫難、殊も多人數
之夏故、一同氣荒騒立い様罷成い而も、不論是非も才方も狭り心得違、家名相失いものも出來可申哉と、村役人
共もおゐても其心配仕、就中去十一月中御出役様方、羽田獵師町御止宿之砌、吉田左内と申者書狀三通持參いぬ

し、御用宿江罷越、御出役様方江御面會申度申中之、人物之様子安心不仕付、其節訴答共詰番罷在御間、右之者共御出役様江差出、右御書狀を乍恐私共江拜見被仰付度申立御處、訴答共御白淵江御呼込ニ相成、爲御立合、三通之内壹通、向島眞兵衛様御開封御讀聞被成御、其文面ニ私共村下字石棒左右海面も不殘羽田獵師町進退ニ相成御様御取斗被成下度、吳々奉願上御と申文面ニ有之、封之上ニ密書と認有之、封狀貳通之分ハ追而爲讀聞可申旨被仰聞、其後一向御讀聞無之、御引拂ニ相成申御、右者向島眞兵衛様御新類方より之書狀ニ承知仕御、乍併御出役様ニも右躰之儀ニ御依之被爲在御儀ハ御坐有間敷間、質素ニ罷在御様小前之者共爲相慎置御處、乍恐訴訟方之者共申口而己御取用、私共村之者共申口も御取潰ニ相成、口書被仰付御杯と小前一統疑惑を生じ、殊ニ私共村之惣代共も、右躰御非分なる口書江何故印形仕御杯と、數千人之百姓共一同騒立、惣代江申懸り立腹仕居御間、漸村役人共種々申諭、一先取鎮、右治方村役人共御欺願可申上と相談仕御内、不得止夏、去ル正月中小前之者共惣代を以、重キ御役人様方迄も御駕籠江御欺願奉申上御趣承知仕、於村役人共重々奉恐入御、前書奉申上御治方ニ付、此儘差置御而亂村ニ相成、大勢之もの故何様之儀仕出可申と難斗、特又獵師共儀も一躰平白氣勝強勢ニ募り御共之故、私共村之もの共海面江罷出御得者、無何惡口雜言申懸ケ、最早此節百姓共濱稼相成不申處、何故罷出御哉杯と口論等いゝ懸ケ御共多分有之、未一件之儀も御裁許等無之内、獵師共儀右躰百姓共江對し濱稼相成不申杯申之御上御、定而實夏御出役様御御内意も有之御度と、小前一同疑念相増、村之獵師之儀も擧擧共違者、殊ニ日々數艘罷出御間、若海中喧嘩等仕懸ケ可申も難斗、小前之者共、片時も安心不仕段、心配相敷罷在、是迄度々百姓共ニ對し獵師共儀海盜同様之所業致し、取揚置御貝藻奪取逃去御儀數度有之、尤明和年中も羽田獵師町之もの共稻荷新田百姓彌市儀を於海面ニ及強勢御間、御紀明之上、當人共ハ過料、名主共も兼

日々申尋方等閑之段不埒ニ付急度御叱被置御旨之御裁許も有之、兎角當々御來御看御用相勤御進、種々權威振御、百姓共押掠、既肥類賣買之儀も前書奉申上御通り、享保十五戌年御裁許之上御免ニ相成御、右之差別も不相辨、都而海面を一圓獵師共持浦進退杯と申欺、大高之御田地相續方江差障り御而已ならず、大勢之者共露命ニも拘り御夏共相功、難澁相掛、依而近年百姓共儀違作相續、其上飢饉等ニ逢、諸色等殊之外高直ニ、一同打破居御處、右躰不夏之出入被致懸ケ、去丑年中も永々御出役有之、諸入用等も多分相掛り、一同此上如何可取續哉杯と朝暮申暮御折柄、海面稼ニ相離れ御儀出來いたし御而も、若出入永引御ハ、百姓共諸入用等出來兼御儀ハ勿論、第一今日暮方ニ差詰り難立行旨、小前之者共老人妻子ニ至迄、此上之非歎、誠以不忍見ニ、捨置御ハ、最早數千之百姓共一所懸命と罷成之儀も必定と見請御ニ付、若亂立御而も、取鎮方村役人之手段ニもおよび申間敷、亂村ニ相成御ハ、必然村方取續方ニ拘り當惑罷在、尤獵師共之様子及承御處、右一件之儀も獵師共一同打揃出入相企御と申儀も無之、羽田獵師町利助、生麥村重治郎其外壹兩人ニ而私欲を以取上候、右之者共儀ハ獵師惣代杯と申、諺ニ公夏師と唱、江戸詰等致居御ハ共、其日何程と申價ニ相成り、獵業もも勝手ニ罷成、當時右等を渡世ニいゝし、就而も出入目論見相企御ものにて、羽田獵師町出生ニ而、當時も江戸橋本町四丁目ニ而甲州屋新兵衛と申旅人宿渡世仕居、是等も訴訟方之者旅人宿ニ付、種々腰押等致し、出入爲致御得、家業勝手ニも相成、且も働次第ニよつて惣應之謝禮も可請對談有之様子ニ付、右之者共惡法功を以、獵師百姓との間柄不成穩、右躰所業之もの共、謀斗を以、村々大勢難澁も勿論、小前之者共爲騒立候而も、村役人共甚以心外至極ニ奉存御、依之晝夜共種々及評儀御處、此上も御上様江御取絶、小前之者共是迄數年來之間堅相守海面渡世罷在御享保十五戌年御裁許被仰渡之通り被仰付被下置御ハ、其節御差免肥類賣買無滯出來、於百姓共聊差支之儀無之、御田地相續ハ勿論、

末迄迄安穩ニ渡世仕、且村方も平和ニ相治リ、乍恐御慈悲是又末迄迄難有奉恐口^{伏か}の半と、不得止更不奉願恐多、此段御敷願奉申上^い、何卒以御慈悲前書申上^い通り、獵師共儀聊御茶御肴御用爲相勤^い迎權威振ひ、百姓共押掠、不筋之儀等品能文面ニ相認メ奉出訴^い始末、乍恐御糺明被成下置、且又今般論所御改御出役様方、於品川宿口書被仰付^い砌、惣代共々申上^いの廉之内、御除ニ相成^い廉も、再御取調被成下置、且前段奉申上^い通り、羽田村并鈴木新田之儀も、全百姓ニ而獵師^ニてハ無御坐^い處、右百姓共專獵業相稼^い而も、獵師共儀其儘差置、出入訴外ニい^いぬし、私共村々斗相手取奉出訴^い始末、是又御糺明被成下置^い様奉願上^い、實以百姓共仕來海面稼方差支ニ相成^い様相成^いハ、末^い之者共今日暮方ニ行詰リ、自^い他^い奉公稼、又^い近邊驛場等^い引越、無據他國^い離散仕^い者出來^い而も、自然村々人少^ニ相成^い儀眼前、左^い而^い御田地^い手余リ、第一御年貢上納^い其外諸御役相勤兼又^い東海道川崎宿^い御傳馬人足^い今^い迄^い之通り相勤^い不中、只今之姿^いてハ村々數千人之百姓共、穩^ニ可相成^い様無之、當惑至極仕^いニ付、以來獵師共儀百姓共往古^い仕來^い海面稼^い決^い而^い不差障様被仰付^い被下置、此節百姓共難澁罷在^い始末、邊^い被爲^い聞召譯御賢察之上、格別以御隣^い百姓共海面稼^い方無差支無難^ニ相續被成^い得^い、大高^い大町步^い之御田地御年貢上納^い勿論、諸御用向無滯相勤^い、小前末^い迄迄安穩^ニ助命罷成、村方人氣も立直リ、平和穩^ニ可相成^いと、且村役人とも村方取續方迄行届キ、乍恐御仁惠之段難有御儀^ニ奉存^い間、此上御慈悲御沙汰舉^い而奉願上^い以上」

以上縷々として百姓側の窮状を訴へたが、この「御箱御敷願書」に記名した村々は十二ヶ村であつて、被告村々の中、糞谷村、東大森村、北大森村、西大森村、不入斗村の五ヶ村は加つてゐない。大森村は後述の如く漁村たる資格を持つてゐたためだらうが、その他は理由不明である。

當時の裁判が結局原被兩造の和解調停を本旨としたため、本件も亦兩者和熟して、濟口證文を評定所へ提出してゐる。事實裁判の遅延は前掲敷願書にあるが如く、百姓側も——又恐らく獵師側も——その負擔に耐へられなかつたであらう。兩者の間に如何なる衝突又は騒動があつたか如何かは解らないが、同年の十一月五日に「濟口證文」を取替してゐる。大體に於いて百姓側の申分が通り、先づ勝利を得たものと云へる。殊に享保十五年の裁許を承認せしめたのは、如何なる方法を以つてしたか解らないが、先の出役人の言を覆させたわけである。次ぎに前掲のものと重複せる部分を除いて、「濟口證文」の全文を掲げる。

「差上申濟口證文之事」

武州荏原郡南品川獵師町外五ヶ浦惣代、羽田獵師町組頭助外貳人、同州橋樹郡小田村名主甚左衛門外三拾九人江相掛魚獵出入、(中略)跡部能登守様江御引繼ニ相成、當時御吟味中之處、掛合之上熟談内濟仕^い趣意左ニ奉申上^い

中略 (このまゝに百姓、獵師兩者の申分を記す、前掲のものに缺けたる分を左に補ふ)

東西子安村^い之もの共申上^いも、古來より獵師共有之稼來^い處、元祿之度兩村^い致高^い分、新宿浦と一村立^ニ相成^い得^い共、獵師共之儀も引續獵業仕來、且百姓共之儀も往古^い磯付村^い組合拾八ヶ村同様の義^ニ而御田地相養、三ヶ村入會^ニ而相稼^い得^い共、新宿浦之儀も小高故、萬端助合一村同様心得相續罷在^い處、實意致忘却、同村重立、八ヶ浦一同難澁申掛、不實至極之致方^ニ而難得其意^い間、以來右躰不法之儀不申掛、無難^ニ相續相成^い様被仰付^い度、且大森村えもの共申立^いも、私共村方之儀も海邊附^ニ而、御入國以來伺嶋獵師共御呼下^ニ相成^い砌茂、當村漁師共を便り住居仕、夫^い轉宅い^いぬし^い得^い共、残り居^いもの共入交り引續致魚漁、百姓共も往古^い、御運上永上

納、磯付拾八ヶ村入會、海面相稼、獵師共義を船役錢相納、元祿之度伊奈半左衛門様を御印帳被下置、六郷井品川筋御成之節、魚漁御上覽相勤、取魚御献上奉申上り處、御同人様御役所江被召出、漁師世話役村役人等迄御褒美被下置、寛政之度葛飾筋水難之砌、御救船御用相勤の節、新規船拾四挺頂戴、其後御成之節茂前同様、其外臨時御用向相勤、刺浦御高札破損等之砌、割合出金仕の義を御座り(中略) 既正徳享保度御當地漁場と及出入の砌、御裁許表を網漁之義を有來通可爲入會と御文言を認有之、安永度御嶋漁師共六人引網及出入の節茂、濟口證文を魚漁仕來りの趣書載、曆然稼方相分の義を訴訟方八ヶ浦を限り差障り段難心得、(中略) 其外品を答上御吟味中之處、今般厚御利解之趣を以示談之上、以來三大森村を古來の獵業仕來り段曆然に付、流網獵御運上永相納の分、御割附表通り六拾九文、船役永相納、御印帳所持之獵師を拾八艘と取極、魚漁いゝし、御茶納方浦入用助合之義を、大井御林町差配を請、依而羽田村を獵船四拾艘、鈴木新主獵船拾五艘、東西子安村を拾七艘與相定メ、右之外魚船一切不差出、尤右之通夫を相極以上も、船目印之儀を、八ヶ浦を而燒極印壹本拵置、致燒印の節も、八ヶ浦井大森村子安村立會致燒印、双方疑惑無之ため箱入いゝし、右浦村役人一同封印いゝし、銘を親浦相預置可申、且右様浦を而進退いゝし共、浦方を相拘りの儀を、八ヶ浦相談之上萬端取斗、自儘之義決而致間敷極、且不入斗村、東西子安村迄、磯付拾八ヶ村、村下通貝類巻取、藻草之義茂同様取揚、田畑肥いゝし、落葉引黒小曳三職之分も、是又村下通磯付白淵之内を格別、藻通を而一切相止、獵業障り不相成様可致、尤黒小曳網之儀獵師共難澁之趣申之に付、自愛を以以來拾八ヶ村之内網數五拾五帖と相定、大小之村を夫を割合相稼、此上網數不相増様、村役人共取締方いゝし置、右村のもの共貝魚聊代替等之儀を仕來通、享保十五戌年御裁許之通堅相守、惣而海面稼方之儀者、正徳享保度御裁許并今般濟口證文爲取替議定之趣、双方違失不仕様堅相守可

申管取極、海面稼方を附而是又双方共差障り不相成様萬端穩に申合取斗、其余申争之廉を、相互に勘辨いたし合、一同無申分熟談内濟仕、偏に御威光と難有仕合奉存い、然ル上者右一件を付重而双方を御願筋毛頭無御座、依之爲後證連印濟口證文差上申處如件

天保十一年七月に始まつたこの事件は、三年越に、天保十三年十一月五日に兎に角落著を告げた。最後の文書中、被告村の中に羽田村及び鈴木新田の二つが加へられてゐるが、これは「御箱御欺願書」に述べてあるやうな理由から追訴されたものであらう。この二ヶ所を加へると、拾九ヶ村になるが、「濟口證文」に組合村を拾八ヶ村と云つてゐるのを見ると、鈴木新田は羽田村に加へて勘定してゐるのかも知れない。しかし後に組合村拾八ヶ村と云つてゐるものを見ると、羽田村を加へてゐない。即ち荏原郡では不入斗、東大森、西大森、北大森、桃谷の五ヶ村、橘樹那では稻荷新田を二つに分け、六郎右衛門組と七郎右衛門組、これに川中嶋、池上新田、大師河原、大嶋、渡田、小田、下新田、潮田、菅澤、東子安、西子安を加へ十八ヶ村を擧げてゐる。即ちこれが天保の事件最初の被告村である。

この和解で百姓獵師の間柄が圓滿に行つたか如何かは頗る疑問であるが、兎に角磯付拾八ヶ村の海面稼方は確認されたものとなつた。両者が衝突した一例としては、嘉永五年四月、羽田獵師町の者が百姓側に暴行を働いた事件がある。川崎宿役人の仲介で、獵師側の謝罪で解決してゐるが、かうした事件は大小の程度の差はあらうが、相當あつたらうと思はれる。この事件について、拾八ヶ村側の訴狀寫及び「羽田獵師町を拾八ヶ村江差出の詫一札寫」があるが、こゝには後者だけを紹介して置く。

「一札之事」

羽田海面稼方に關する紛争

一當村町之者共、海邊組合拾八ヶ村之内、荏原郡不入斗村百姓惣五郎、東大森村同定五郎、橋樹郡小田村同重兵衛、下新田村同八郎兵衛、同清右衛門と申者、當月十二日夜、小田、渡田兩村下ニおゐて、黒小曳網獵相稼ゆ場所江船貳艘、人數拾人程乗組、右網預り参りゆ處、右村方之者共夜中故致方無之、(訴狀の記事は下の如し、「去ル十二日夜六ツ半時頃、不知何者と、船貳艘江人數四五拾人乗組、鉈并手刃庖丁其外脇差等携参り、前書網獵相働居ゆ場所江乗入、大勢無拵ニ網奪取、若手出致ゆもの有之ゆハ、可打殺旨申威、網五帖被奪取、殊ニ夜中之儀故、陸迄ハ廿町余濟海中ニ付其儘罷歸りし銘、夫々御村役人中江相届、猶組合大惣代衆江も、是亦被相届、神奈川、生麥、羽田獵場爲相尋、神奈川生麥江ハ村方之もの共御差出、羽田獵師町江ハ惣代衆と道案内之者被差出、關東御取締御出役様江ハ御用狀ヲ以御注進被成置、且道案内之者共、當町ニ而前書黒小曳網貳帖見當り、則村役人方江相届罷歸りゆニ付、其段御取締御出役渡邊園十郎様御廻り先江右始末御申立、畢竟黒小曳網之義、天保十三寅年八ヶ浦と海邊組合拾八ヶ村と魚獵出入、跡部能登守様御勘定御奉行御勤役中、一件内濟仕、熟談濟口證文ニ茂、組合拾八ヶ村ニ而黒小曳網數五拾五帖自愛ヲ以取極、右網數ハ余慶有之ゆて可及掛合ニ格別、聊之網數罷出相稼ゆ場所ハ村々地附村下ニ相違然之、右場所ニ而相稼ゆ黒小曳網師共彼是申ゆ事ニ不都合之申分、殊ニ先年御奉行所ニ而御利解有之ゆを、今般亡脚致しゆ義ニ而無之ゆ得共、前書名前之ものとも夜中之儀故、藻通相働居ゆと存、全心得違ニ而黒小曳網預り罷歸りゆ間、夫々及挨拶、網可相返と相談中、其御村方ハ御尋、手後ニ相成ゆ段相違無之ゆ得共、右始末其筋ニ而受御調ゆ何様之義可被仰付茂難斗、依之右始末御吟味以前、川崎宿名主三右衛門殿、同庄左衛門殿、五兵衛殿扱人ニ被立入事柄被取調ゆ處、村役人方江不沙汰ニ黒小曳網引揚ゆ段ニ相託ゆ處、御承知被下恭奉存ゆ、然ル上ニ以來天保十三寅年濟口證文并議定之趣、雙方共違失不仕ゆ様堅相守、此上違も村

ニ而藻通ニ而魚獵一切相止、白洲之場場ニ而相働ゆを、向後手荒之所業ニ勿論、不穩成仕出ゆハ、此書面ヲ以如何様共御取斗可被成ゆ、且亦前書預來ゆ黒小曳網之儀ニ破損等取締、村々江相返可申ゆ、依之爲後證扱人連印之一札差出申處如件」

以上の諸文書に依つて見れば、磯付村拾八ヶ村は天保以前慣習的に一つの組合村らしき形態を有してゐたのであるが、少なくとも天保十一年の紛争以來、全く一個の海邊漁業組合を構成したものであると思はれる。勿論それは農間稼ぎであつたかも知れないが、副業としては相當有利なものであつたらう。八ヶ浦獵師の組合についても、又この組合についても、規約その他が存してゐたか如何か、未だそれ等については何等の資料をも發見し得ない。

(昭和十年十月九日稿)